九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『千載佳句』所収盛唐詩人僧貞幹・張諤・丁仙芝考

劉, 潔
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程修了

https://doi.org/10.15017/1650643

出版情報：中国文学論集. 44, pp.83-97, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『千載佳句』所収盛唐詩人僧貞幹・張諤・丁仙芝考

劉　潔

『千載佳句』に収録される詩人百五十三名のうち、盛唐の詩人（無名氏は考慮しない）は王維、李範、張諤、崔顥、李白、杜甫、何仙芝、劉長卿などあわせて十数名に及ぶ。これらの詩人の一部については、すでにその生涯や官歴、作品等が明らかにされているが、『千載佳句』を資料として挙げるものは極めて少ない。またこれらの詩人のうち『千載佳句』にしか作品が残存しない詩人となると、資料の限界もあり、これまで本格的な研究はほとんど皆無であった。だが近年、新たな出土資料の発見が続々と報告されており、これらの資料を用いれば、従来考証が難しかった詩人についても新たな発見が可能である。本論文では、『千載佳句』所収の盛唐詩人、特に従来考証が不十分であった人物の生涯や作品について、新資料を用いて考察し、文学史における空白部分の解明を試みたい。

一　僧貞幹について

貞幹については、現在中国側の文献に一切の記録が残っておらず、『千載佳句』遊放部遊猟に彼の七言詩「賀幸華清宮（華清宮に賀幸す）」の一聯「鷹隼風高隨草去、旌旗日晩傍山來（鷹隼 風 高く草に随ひて去り、旌旗 日 晩れて山に傍ひて来たる）」が収められるのみである。『全唐詩逸』はこの詩句を佚詩として採録し、作者の「貞幹」について「真幹。真、一作直」と記す。[2] 従来、貞幹に関する記録は概ねこの資料に基づくほか無いのが現状であった。『唐詩大辞典』にも、『全唐詩逸』と同じく「貞幹」を「真幹、一作直幹」とし、「僧人。生平無考。『全唐詩逸』収

詩二句、録自日本大江維時編『千載佳句』巻下」とあるのみで[3]、これまで本格的な考証はなされていない。だが近年、西安や洛陽近辺で大量の唐代墓誌文献が出土し、筆者はその中に貞幹の「大唐開元慶山之寺上方舎利塔記」という作品が含まれているのを発見した。これは貞幹の生涯や文学を明らかにする上で重要な手懸りとなる。以下に本文を引用する。

涯夫真相不住曰應、惠力不拔曰堅。難目乎端倪、靡分乎皦昧、矧靈化不歇、分百億身耶。則知佛雨溥興、滅大宅之火、慈艫廣鶩、洊彼岸之津。衡其功、點恒沙之塵。酌其微、納須彌之芥。匪湟匪朽、骨之有光。不騫不崩、瓶以合照。椁之以瓌寶、尊其異也。衾之以錦綺、形其信也。罕可贍禮、其至謂歟。此寺迦藍、因神山踊建、劃鴻門之左阜、南揭驪嶺、劃象河之大川、北横豐樹。漢之勝地、首在茲乎。壓重林、亘絶巘、肇創曾塔。欻遭大風、欒橑中隳、歳月亦久。賴前邑宰唐俊、下車不日、貞信孔崇。哀此荒涼、僉誰而可。迺命京溫國寺承宗法師充寺主。師冰徹性靈、松標節檢。知福田可作、識苦集若流。精舎席其風、鄰閭肩其行。自廿五歳、迨廿九年、寒暑不勞、土木躬力。載謀載搆、是階是堵。□倕妙近、不召以子來。豫章巨材、匪求以人施。方虬奮浮、柱中閫清霄。鳳翔懸題、下簷白日。屏諸天於外戸、逶迤若還。牀衆聖扶中軒、儼峩不動。能事畢萃、功德克周。允由僧徒同心、里閭罄信者矣。歳次鶉尾月惟仲呂日戊子、爰葬于舎利茲岩頂也。士女星奔以虔繞、阡陌晝空。童耋霧委以歸依、榛蕪成徑。瞻言仡立、作鎮大千。俾無疆之休、永永於皇祿。必感之祉、祑祑於黔黎。幽昭有憑、龍神聿会。將貽究竟之典、固勒他山之石。不墜覺果、式揚斯文。詞曰、惟滅度兮苟現真骨、炯昏沉兮惠性齊發。超祇刼兮作藩作離、拯逝世兮爲筌爲栰。

當寺大德惠燈、晤玄、思遠、謙巳、上座太暉寺主承宗、法宗、休巳、道琳、修己、鳳仙等同建。

大唐開元廿九年四月八日

涯夫 真相 住まざるを応と曰ひ、恵力 抜かざるを堅と曰ふ。端倪を目るは難しく、皦昧を分かつ靡し、矧(ま)して霊化 歇まず、百億の身を分するなり。則ち仏雨の溥く興し、大宅の火を滅し、慈艫の広く鶩き、彼岸の津に洊(いた)るを知る。其の功を衡(はか)れば、恒沙の塵を点す。其の微を酌すれば、須弥の芥を納る。湟ず朽ちず、骨の光有り。

騫らず崩さず、瓶を以て合照す。之を椁するに瓌宝を以てするは、其の異を尊ぶなり。之を衾むに錦綺を以てするは、其の信を形すなり。罕に礼を贍るべし、其の至れる謂なるか。此の寺の迦藍、神山に因りて踊建し、鴻門の左阜を劃し、南に驪嶺に揭し、象河の大川を劃い、北のかた豊樹に横る。漢の勝地、首は茲に在らんか。重林を圧し、絶巘に亙り、肇めて曾塔を創す。欻かに大風に遭い、欒橑 中隳し、歳月 亦久しうす。頼ひに前の邑宰の唐俊、下車 日ならず、貞信 孔崇たり。此の荒涼を哀れみ、誰を僉して可とす。迺ち京の温国寺の承宗法師に命じて寺主に充つ。師 冰徹 性霊、松標 節検なり。福田 作る可きを知り、苦集 流るるが若きを識る。精舎 其の風を席き、鄰閭 其の行に肩ぶ。廿五歳より、廿九年に迨び、寒暑に労らず、土木に力を躬くす。載ち謀り載ち搆へ、是れ階是れ堵。□倕の妙近、召さずして以て子 来たる。豫章の巨材、求めずして以て人 施す。方虬 奮浮し、柱中 閫 清霄あり。鳳翔 題に懸り、下に白日を簷る。諸天を外戸に屏き、逶迤 還るが若し。衆聖を牀き、中軒を扶き、儼峩 動かず。能事畢萃し、功徳 克周す。允に僧徒の同心、里閭の罄信の者に由るかな。歳次は鶉尾、月は惟仲呂、日は戊子、爰に舎利を茲の岩頂に葬す。士女 星奔し虔繞し、阡陌 昼に空く。童耋 霧委以て帰依し、榛 蕪に 径を成す。瞻言 仡立し、大千を作鎮す。無疆の休、皇禄に永永とし、必感の祉、黔黎に祓祓とせ俾む。幽昭 憑有り、龍神 聿に会ふ。将に究竟の典を貽り、固り他山の石を勒す。覚果に墜ちず、式に斯文を揚ぐ。詞に曰く、惟だ滅度すれば苟に真骨を現し、昏沈を炯すれば恵性 斉しく発す。祇刼を超えて藩と作り離と作り、逝世を拯ひて筌と為し栰と為す。当寺の大徳の恵灯、晤玄、思遠、謙巳、上座の太暉寺の主の承宗、法宗、休巳、道琳、修己、鳳仙等、同に建つ。大唐開元廿九年四月八日[4]

この塔記を刻した上方舎利塔記碑は、一九八五年五月五日、陝西省西安市から三十公里の郊外にある新豊鎮露台郷で発見された[5]。釈迦牟尼の真身舎利を改葬する際に製作されたもので、文末に「大唐開元廿九年四月八日」とある。また題下に「翰林内供奉僧貞幹詞兼書（翰林内供奉の僧の貞幹 詞し兼ねて書す）」とあり、ここから貞幹が碑文の製作と揮毫を行ったことがわかる。

まずはこの題下の「翰林内供奉」に注目しよう。管見の限り、唐代の文献にこのような官職名を見出すことはで

きない。ただよく似た職に「翰林供奉」があり、これは『新唐書』百官志に「唐制、乗輿所在、必有文詞、經學之士、下至卜、醫、伎術之流、皆直於別院、以備宴見……玄宗初、置「翰林待詔」、以張說、陸堅、張九齡等爲之、掌四方表疏批答、應和文章。既而又以中書務劇、文書多壅滯、乃選文學之士、號「翰林供奉」、與集賢院學士分掌制詔書敕。開元二十六年、又改翰林供奉爲學士、別置學士院、專掌内命（唐制に、乗輿の在る所、必ず文詞有り、経学の士、下は卜、医、伎術の流に至るまで、皆別院に直し、以て宴見に備ふ……玄宗の初、「翰林待詔」を置き、張説、陸堅、張九齡等を以て之と為す、四方の表疏批答を掌り、文章に応和す。既にして又中書の務劇しく、文書多く壅滞するを以て、乃ち文学の士を選びて、「翰林供奉」と号し、集賢院学士と制詔書敕を分掌す。開元二十六年、又翰林供奉を改めて学士と為し、学士院を別置し、専ら内命を掌る）」とあるように、「翰林供奉」が国家の政事に携わる官職で、その後身は開元二十六年に改名された「翰林学士」であることがわかる。僧侶である貞幹が、このような重職に就くことは通常はありえない。一方で当時、「内供奉」という職もあった。高宗期に新設された非正規の役職[6]で、即ち皇帝の側近として侍し、庶務を処理する臨時職であった。つまり翰林院の宮廷文人や、書や絵画を得意とする僧侶や道士らが、内供奉と称して君主に侍駕していたのである（例えば天宝十五年春に立石された「溧陽瀨水貞義女碑銘并序」には、撰者に「前翰林院内供奉学士隴西李白」とある[7]）。貞幹が宮中において内供奉の職にあったのならば、彼が「賀幸華清宮」を製作したのも自然な成り行きである。恐らくこれが事実であろう。

またこれによって、なぜ僧侶である彼の作品が『千載佳句』の遊放部遊猟に収録されるのかという疑問も一気に氷解する。僧侶は元来殺生を禁じられているが、貞幹が翰林内供奉であったならば、玄宗に扈従して狩猟を実見することも可能だからだ。また「鷹隼風高隨草去、旌旗日晚傍山來」という表現は、後年、中唐の鄭嵎「津陽門詩（並序）」にも「五王扈駕夾城路、傳聲校獵渭水湄。……赤鷹黃鶻雲中來、妖狐狡兔無所依。人煩馬殆禽獸盡、百里腥羶禾黍稀（五王 夾城の路に扈駕し、伝声 渭水の湄に校猟す。……赤鷹黄鶻 雲中より来たり、妖狐狡兔 依る所無し。人煩ひ馬殆く 禽獸 尽き、百里 腥羶にして 禾黍 稀なり）」とあり、臨場感のある表現である。実際に貞幹がその目で見た狩猟の描写であると思われる。

次に、貞幹の塔記とその特徴について考察したい。先述の彼の塔記を見ると、駢文体で書かれている。その内容

は、まず仏法の偉大さと舎利の尊さを讃え、慶山寺の舎利塔の建立と老朽化の状況を述べて、前県令の唐俊や長安の温国寺の承宗らの援助を得て、舎利塔の修復が行われたことを記した後、仏舎利改装の儀式が盛大に行われる様子を描くものである。明快な文章構成に、優美な文章表現、また字体は六朝の華麗な書風と楷書の端的な美しさを備え、生き生きとした筆遣いが特徴的である。[8] ここからも、貞幹が仏事だけでなく文芸や書においても深い造詣を有していたことが十分確認できる。

慶山寺については、すでに専論があり、その遺址は陝西省臨潼県の城南、西の西安市から二十五キロ離れた驪山の北麓にあるという。[9] これは華清宮とも非常に近い位置にある。

またこの華清宮は元は温泉宮といい、華清宮と改称されるのは天宝六載のことであるから、[10]「賀幸華清宮」の創作時期は、必然的に天宝六載以降となる。

最後に、『宋高僧伝』「唐呉郡嘉禾貞幹伝」にも「貞幹」という人物についての記述が見えるが、この人物は、武宗による会昌の廃仏によって廃寺となっていた崑山寺を再興した[11]のであり、明らかに盛唐期の人ではなく同名の別人である。

以上、『千載佳句』に見える貞幹の生涯について明らかにした。貞幹は、玄宗期において宮中に仕えた僧侶であった。仏道教学に精通していたほか、文学や書道にも明るく、開元二十九年には皇族の寺院である慶山寺の祭典に参加し、「開元慶山寺上方舎利塔記」を書いた。その後天宝六載或いはそれ以降、玄宗の華清宮行幸に従い「賀幸華清宮」を創作した。そしてこの作品が、日本に伝わり『千載佳句』に採録されたのである

二　張諤についての考証

張諤の生涯に関する資料は極めて少ない。『旧唐書』、『新唐書』、『唐会要』、『唐詩紀事』等に言及があるものの、例えば『旧唐書』睿宗諸子伝に「万年尉の劉庭琦、太祝の張諤 皆（岐王李）範と酒を飲み詩を賦すに坐す。庭琦黜（しりぞ）けられて雅州司戸と為り、諤 山荘丞と為る」とあるように、その内容は唐玄宗の実弟である岐王李範との交際の

ために左遷されたことを記すのみで、彼の生涯や作品については語られない。[12] それゆえ、日本側の資料である『日本国見在書目録』に「張諤集一（巻）」とあり、また『千載佳句』に張諤の七言詩二聯が残されているのは注目に値する。中国の文献では張諤の別集の存在は一切触れられておらず、また各種唐詩選集にも彼の作品は一切収録されていないからである。彼の作品や経歴、交友関係についてはまだ本格的に研究されたことがなく、多分に研究の余地がある。本論文では上述の資料に加え、新出土資料である張諤撰「唐故潁王府録事參軍郜君墓誌銘并序」[13]についても考察する。

張諤の仕官について、関連する資料は以下の通りである。

①陳王掾張諤五首。（『国秀集』巻中）

②（岐王李範）與閻朝隱、劉庭琦、張諤、鄭繇篇題唱和、又多聚書畫古跡、爲時所稱。時上禁約王公、不令與外人交結。駙馬都尉裴虚己坐與範遊讌、兼私挾讖緯之書、配徙嶺外。萬年尉劉庭琦、太祝張諤皆坐與範飲酒賦詩、黜庭琦爲雅州司戸、諤爲山莊丞。

（岐王李範は）、閻朝隱、劉庭琦、張諤、鄭繇と篇題唱和す。又 多く書画古跡を聚め、時の称する所と為る。時に上 王公を禁約し、外人と交結せしめず。駙馬都尉の裴虚己 範と遊讌し、兼ねて讖緯の書を私挾するに坐し、嶺外に配徙せらる。万年尉の劉庭琦、太祝の張諤 皆範と酒を飲み詩を賦するに坐し、黜（しりぞ）けられて庭琦は雅州司戸と為り、諤は山莊丞と為る。（『旧唐書』巻九五「睿宗諸子伝」）

③萬年尉劉庭琦、太祝張諤。數與範飲酒賦詩、貶庭琦雅州司戸、諤山莊丞。

万年尉の劉庭琦、太祝の張諤。数（しばしば）範と飲酒賦詩し、貶さるるに庭琦は雅州司戸たり、諤は山莊丞たり。（『資治通鑑』巻二一二「唐紀二十八、玄宗開元八年」）

④諤、登景龍進士第。岐王範好儒士、與閻朝隱、劉廷琦、鄭繇等飲酒賦詩。駙馬都尉裴虚己善讖緯、坐私與範游、徙嶺南、廷琦貶雅州司戸、諤山莊丞、然明皇于範無間也。

諤、景龍進士の第に登る。岐王範 儒士を好み、閻朝隱、劉廷琦、鄭繇等と飲酒賦詩す。駙馬都尉の裴虚己

識緯を善くし、私かに範と遊ぶに坐して、嶺南に徙され、廷琦 雅州司戸に貶され、諤 山荘丞たり、然れども明皇 範に間たる無し。（『唐詩紀事』巻一五）

⑤張諤、景龍中登進士第。仕爲陳王掾。岐王範雅好儒士、諤與閻朝隱、劉庭琦、鄭繇等皆從之遊、賦詩飲酒。後坐貶山荘丞。詩十二首。

張諤、景龍中 進士の第に登る。仕ふるに陳王掾たり。岐王範 雅に儒士を好み、諤は閻朝隱、劉庭琦、鄭繇等と皆之に従ひて遊び、賦詩飲酒す。後に坐して山荘丞に貶さる。詩十二首あり。（『全唐詩』巻一一〇）

資料④と⑤から、張諤が中宗の景龍年間に科挙に及第したことがわかる。『登科記考』ではさらに詳細な考証を行い、その時期を景龍二年（七〇八）と指摘する。[14] また上述の五つの資料から、張諤が陳王掾や太祝、山荘丞の職にあったことがわかる。太祝とは正九品[15]で、主に「掌讀祝文、出納神主（祝文を掌読し、神主を出納す）」任務を司った。[16] 資料③は、張諤がその太祝から山荘丞に左遷されたことを述べる。また陳王掾は、陳王府の掾属である。開元年間の敕制によれば、親王府には「掾一人」を置き、「通判功、倉、戸三曹」とある。[17] 高宗から玄宗の時代にかけて陳王に封じられた者は全部で三名おり、うち一人は貞観二十年（六四六）八月に陳王となり、[18] 永徽三年（六五二）七月に皇太子に立てられた[19]高宗の長子李忠である。また二人目は、開元二十一年（七三三）九月に陳王に封じられた[20]玄宗の長子李潅である。そして三人目は、開元二十三年（七三五）に陳王に封じられた[21]玄宗の息子李珪である。ではこの三人のうち、張諤は一体誰に仕えたのだろうか。まず、資料③から張諤が山荘丞に左遷されたのが開元十年とあること、また張諤には開元十三年（七二五）に玄宗の泰山封禅の様子を述べた「東封山下宴群臣」詩があることから、陳王の李忠は年代が合わない。また、張諤が山荘丞に左遷された時期と李潅、李珪が陳王に封じられた年を考え合わせると、彼が陳王掾の職に就いたのは、左遷以降であると推測される。さらに張諤の「唐故潁王府録事參軍郜君墓誌銘并序」について分析すると、この作品が製作されたのは、張諤が「國子監四門博士」であった時とわかる。四門博士とは、開元二十五年の敕令によって設置された正七品の官職である。[22] その成立背景について『通典』巻五三「礼十三」に「貞觀五年、太宗數幸國學……無何、高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃諸國酋長、亦遣子弟

請入國學。於是國學之内八千餘人。國學之盛、近古未有。龍朔二年、東都置國子監、丞、主簿、録事各一員、四門博士、助教、四門生三百員（貞観五年、太宗数国学に幸し……何も無くして、高麗、百済、新羅、高昌、吐蕃の諸国の酋長、亦 子弟を遣はし、国学に入らんことを請ふ。是に於て 国学の内 八千余人あり。国学の盛んなること、近古に未だ有らず。龍朔二年、東都に国子監を置き、丞、主簿、録事各一員、四門博士、助教、四門生 三百員）」とある。初唐では国学が重視されたため、龍朔二年（六六二）には長安に続いて東都洛陽にも四門博士が設立された。また墓誌銘にあるように、墓主の郜崇烈は「洛陽感徳里の私室」において逝去した。よって張諤は、洛陽の四門博士であったと思しい。また郜氏が死去したのは「開元廿有八祀五月八日」であるから、張諤が四門博士だったのは開元二十八年、或いはそれに前後する時期であろう。墓主の郜氏は墓誌銘中に「潁王府録事参軍」とあり、玄宗の第十三子李澐の潁王府の録事参軍であった。[23] 墓誌銘の序文には「解褐以諸親拜太州參軍、轉司禮太祝、秦府功曹、蘇州司法、潁王録事。無何、以内憂免官。……荏苒五莅事、蹉跎一掾曹。不以位卑而荒厥政、不以禄薄而怨其時（解褐し諸親を以て太州参軍を拜し、司礼太祝、秦府功曹、蘇州司法、潁王録事に転ず。何も無くして、内憂を以て免官さる。……荏苒 五莅事、蹉跎 一掾曹。位の卑きを以て厥の政を荒らず、禄の薄きを以て其の時を怨まず）」とあり、郜崇烈もまた張諤と同じく上中級役人ではなかった。

次に張諤の交遊関係に関しては、次の資料が注目される。

（徐浚）往往警策、蔚爲佳句。常與太子賓客賀公、中書侍郎族兄安貞、呉郡張諤、會稽賀朝、萬齊融、餘杭何謇爲文章之游。凡所唱和、動盈巻軸。

（徐浚は）往往にして警策あり、蔚として佳句を為す。常に太子賓客の賀公、中書侍郎の族兄安貞、呉郡の張諤、会稽の賀朝、万斉融、余杭の何謇と文章の遊を為す。凡そ唱和する所、動もすれば巻軸に盈つ。

（徐浩「唐故朝議郎行馮翊郡司兵参軍徐府君（浚）墓誌銘並序[24]」）

ここから張諤の原籍が江蘇呉郡であること、そして当時江南では賀知章を中心とする文学集団が形成されており、

張諤もこれに参加していたことがわかる。[25] つまり、張諤は長安において岐王李範が私的に主催する文学集団に参加しただけでなく、江南の文壇でも活躍していたのである。ただし一地方に過ぎない江南の社交界では規模に限界があり、やはり張諤にとっては都長安での交遊のほうが人脈や名声を得る機会は多かったはずである。

張諤の作品はほとんど現存しておらず、『全唐詩』にもわずかに十二首が収録されるのみで、その多くは五言の侍宴詩や唱和詩である。ただしこのうち五首が『国秀集』に（「東封山下宴群臣」、「岐王美人」、「贈吏部孫員外済」、「岐王山亭」、「九日宴」）、また三首が『搜玉小集』（撰者不明）に収められ（「三日岐王宅」、「満月」、「岐王席上詠美人」）、さらに一首が五代の韋穀編『才調集』に収録される[27]（「還京」）。しかも、『国秀集』に収める詩歌は「風流婉麗（風流 婉麗にして）」、「可被管弦（管弦に被る可し）」といった作風のもの[28]が多く、『搜玉小集』では応制、奉和、閨怨、述懐などがあり、そして『才調集』に採録されるのは「韻高而桂魄争光、詞麗而春色鬬美（韻高くして桂魄光を争ひ、詞麗にして春色 美を鬬はす[29]）」などの詩であることから、張諤の詩歌は華麗で音楽に合わせて唱われる性格を持っていたことがわかる。また彼の詩歌はこれらの詩歌選集に多く収められているので、彼の作品が当時広く流行していたことが推察される。『千載佳句』に収録される彼の二聯の詩句、すなわち宴喜部踏歌に属する「月夜看美人踏歌」詩「天上恒娥遙解意、偏教月向踏歌明（天上の恒娥 遥かに意を解き、偏教 月 踏歌[30]に向かひて明らかなり）」や、別離部送別に属する「翫山月送百九」詩「共待山頭明月上、照君行棹出長川（共に待つ 山頭 明月の上るを、君が棹を行ひ長川に出づるを照らす）」など、歌舞、美人、別離等の題材を扱っており、唐詩選集の張諤の作風とほぼ一致する。

以上、盛唐詩人の張諤は江蘇の呉郡の人であり、景龍二年（七〇八）に進士に及第し、太祝、山荘丞、陳王掾等の職を奉じた。また洛陽で四門博士を務めていた頃、墓誌銘を製作した。さらに張諤は、官位が低く、特に目立った業績が無かったにも拘らず、長安のみならず、江南における文学活動にも積極的に参加し、当時彼の作品は広く流行していた。彼の作品が日本に伝えられて平安時代の古文献に今なお保存されるのはこのためであろう。

三　丁仙芝とその「陪岐王宅宴」詩について

丁仙芝の経歴についても資料が乏しい。ただし儲光羲の「貽丁主簿仙芝別」詩から、丁仙芝が開元十三年（七二五）に進士に及第したことがわかる。[31] その後長く仕官できず、開元十八年にようやく職を得たが、主簿や余杭尉といった下級役人に過ぎなかった。丁仙芝の作品について、まず別集が残っておらず、また『全唐文』等の文献にも採録されていない。わずかに数首の詩歌がいくつかの唐詩選集に収録されるのみである。しかもこれらの中には、孟浩然の作品を誤入したものや、作者が丁仙芝であるかどうか疑わしいものも含まれる。丁仙芝の官位が低かったこと、彼の作品が生前それほど流行しなかったことから、文壇における当時の彼の声望や影響力は決して大きくはなかったと推察される。しかしながら一方で『千載佳句』は、四時部早秋に彼の詩「陪岐王宅宴（岐王宅の宴に陪す）」の一聯「雨鳴鴛瓦收炎氣、風巻珠簾送曉涼（雨　鴛瓦を鳴らして炎気を収めしめ、風　珠簾を巻きて暁涼を送る）」を収める。この作品は、中国側には全く伝わらない資料であり、丁仙芝の生涯や文学を考える上で重要な手がかりとなる。

まず、『千載佳句』に収録される丁仙芝詩から、彼の作品の伝播状況を見ていきたい。丁仙芝の詩歌は、生前には当時の唐詩選集にも採録されており、例えば『国秀集』に「京中守歳」一首を収め、[32] 作者を「余杭尉丁仙芝」と記す。ここから丁仙芝が余杭尉の任に就いたのは、『国秀集』が成立する天宝三年（七四四）より以前であることがわかる。この時期すでに丁仙芝の作品は「可披管弦」、つまり音楽に合わせて唱われていたのである。『楽府詩集』「相和歌辞一」に丁仙芝の「江南曲」五首を採録していることが、このことを証明していよう。また、同時代の殷璠編『丹陽集』も丁仙芝の作品数首を収録する。『丹陽集』について、『新唐書』「芸文志」の「包融詩」の注に、「曲阿有餘杭尉丁仙芝、緱氏主簿蔡隠丘、監察御史蔡希周、渭南尉蔡希寂、處士張彦雄、張潮、校書郎張暈、吏部常選周瑀、長洲尉談戴、句容有忠王府倉曹參軍殷遙、硤石主簿樊光、横陽主簿沈如筠、江寧有右拾遺孫處玄、處士徐延壽、丹徒有江都主簿馬挺、武進尉申堂構、十八人皆有詩名。殷璠彙次其詩、爲『丹楊集』者。（曲阿に余杭尉の丁仙芝、緱氏主簿の蔡隠丘、監察御史の蔡希周、渭南尉の蔡希寂、処士の張彦雄、張潮、校書郎の張暈、吏部常選の周瑀、

長洲尉の談戴有り、句容に忠王府の倉曹参軍の殷遥、硤石主簿の樊光、横陽主簿の沈如筠有り、江寧に右拾遺の孫処玄、処士の徐延寿有り、丹徒に江都主簿の馬挺、武進尉の申堂構有り、十八人皆 詩名有り。殷璠 其の詩を彙次し、『丹楊集』なる者を為る）」とある。ここから『丹陽集』が特定の地域に偏向した選集であることがわかる。すなわち該書に収録される十八名はみな潤州（今の江蘇省鎮江市）出身の詩人なのである。この詩集自体は後に散逸し、丁仙芝の作品が如何なるものであったか、現在では知るよしもない。だが彼の作品は、『吟窗雑録』に「仙芝詩婉麗清新、迥出凡俗、恨其文多質少（仙芝の詩は婉麗清新にして、迥かに凡俗を出づ、其の文多く質少なきを恨む）」[33]と評され、文才を高く評価されている。『丹楊集』は開元二十三年から二十九年の間[34]に成立しており、したがって開元後期には丁仙芝の詩が一定の評価を得ていたことがわかる。また『崇文総目』に「『丹楊集』一巻」と著録されていることから、『丹楊集』は北宋までは伝存しており、さらに『日本国見在書目録』には「『丹楊集』一（巻）」とあり、日本にも伝来していた。ところで、『日本国見在書目録』には「『河嶽英霊集』一（巻）」と「『荊楊挺秀集』二（巻）」の存目もある。『河嶽英霊集』も『荊揚挺秀集』も、『丹陽集』の編者である殷璠が編纂した唐詩選集である。[35]前者は丁仙芝の作品を収めておらず、後者は宋代に既に散佚してしまったが、殷璠が編纂した三つの選集が全て日本に持ち込まれたのは、彼の唐詩作品に対する見識が当時広く受け入れられていたことの現れであろう。丁仙芝に別集がなく、『丹楊集』に丁仙芝の作品についての言及があり、また『荊揚挺秀集』も彼の詩を収録していた可能性を考慮すれば、『千載佳句』の「陪岐王宅宴」の祖本は、この二つの唐詩選集のうちのいずれかである可能性が極めて高い。

次に詩題の「陪岐王宅宴」について検証したい。「岐王」は「好學尚書、雅愛文章之士……時士庶冀有所成功（学を好み書を尚び、文章の士を雅愛す……時の士庶 成功する所有らんことを冀ふ）」と評された李範を指す。[36]丁仙芝が進士に及第したのは開元十三年（七二五）で、その翌年に李範が死去したため、「陪岐王宅宴」が創作されたのは彼の科挙登第以前のことであると考えられる。[37]しかも丁仙芝は長安に滞在中、権貴に知遇を求める作品を製作しており（例えば「贈朱中書」詩に「紫微侍郎白虎殿、出入通籍廻天眷。晨趨綵筆柏梁篇、晝出雕盤太官膳。會應憐爾居素約、可即長年守貧賤（紫微の侍郎 白虎の殿、出入通籍し天眷を廻る。晨に趨りて「柏梁篇」を綵筆し、昼に出

で太官膳を雕盤す。会ず応に 爾の素約に居くを憐れむべし、即ひ長年なるも貧賤を守るべし[38]」とある)、またこの「陪岐王宅宴」中に描かれる宴席は、「士庶 成功する所有らんことを冀ふ」とされた岐王李範の邸宅である。よってこの詩は恐らく、李範に仕官の斡旋を求める目的で創作されたのだろう。

さらにここで、丁仙芝の交遊関係について考察してみたい。現存する彼の詩「贈朱中書」、「戯贈姚侍御」「余杭醉歌贈呉山人」から、彼が朱中書、姚侍御、隠者の呉山人と交遊があったことがわかる。また丁仙芝の「唐故随州司法参軍陸府君(広成)墓誌銘並序[39]」という作品がある。この墓誌銘の撰者「丁仙之」は「丁仙芝」であり[40]、「前国子進士」と記される。墓誌銘には墓主の陸広成が「始以弱冠補國子生。明申公詩及左氏傳。登太常第、調補隨州司法參軍(始め弱冠なるを以て国子生に補さる。申公詩及び左氏伝に明らかなり。太常第に登り、調せられて随州の司法参軍に補さる)」とあるため、両者は国子監生であった際に知り合ったとする説もある[41]。陸広成は随州の司法参軍として生涯を終えているから、やはり下級役人の一人に過ぎなかった。このため丁仙芝と交遊があったことがわかっている者のうち、彼が仕官の斡旋を求めるほどの高位にあったのは「朱中書」のみである。『千載佳句』所収の丁仙芝の作品に「岐王」と現れることにより、丁仙芝の仕官斡旋を求めた対象を補足でき、したがって、丁仙芝の交遊関係において新たに岐王李範という皇室関係者の存在を見出すことができるのである。

注

(1)　詩題の「賀」を『全唐詩逸』は「駕」に作る。「賀幸」は唐代にはあまり見られない用例であるのに対し、「駕幸」は君主に扈遊する際に当時よく使われた語句である。例えば玄宗期の宰相韓休の「駕幸華清宮賦以温泉毖湧盪邪難老為韻」(『文苑英華』巻五八)や林琨の「駕幸温泉宮賦以天下安樂明主宴遊為韻」(同上)など。ゆえに『全唐詩逸』に従い「駕幸華清宮」と作るのが妥当とも思われるが、筆者が確認し得た『千載佳句』はいずれも「賀」に作り、かつ『全唐詩逸』が「駕」と作る理由が不明瞭なため、ここでは『千載佳句』に従う。なお韓休は開元二十七年(七三九)に病没している(『旧唐書』巻九八、三〇七九頁)ので、「駕幸華清宮賦以温泉毖湧盪邪難老為韻」に「華清宮」とあ

るのは後人の補筆であろう。

(2) 『全唐詩逸』巻中（中華書局、一九六〇年、一〇二一頁）。
(3) 周勛初『唐詩大辞典』修訂本（鳳凰出版社、二〇〇三年、三二五頁）。
(4) 呉鋼『全唐文補遺』第一輯（三秦出版社、一九九四年、五頁）。
(5) 趙康民「臨潼唐慶山寺舎利塔基精室清理記」（『文博』第五期、一九八五年）。
(6) 『通典』巻二四「職官六」（中華書局、一九八八年、六六一頁）。
(7) 瞿蛻園、朱金城『李白集校注』巻二九（上海古籍出版社、一九八〇年、一六四八頁）。
(8) 顧承甫「唐代慶山寺小考」（『史林』第一期、一九八六年）参照。
(9) 上掲注（8）参照。
(10) 『旧唐書』巻九「玄宗本紀」（二二一頁）参照。
(11) 賛寧『宋高僧伝』巻二七（范祥雍点校、中華書局、一九八七年、六七六～六七七頁）「唐呉郡嘉禾貞幹伝」を参照。
(12) 『旧唐書』巻九五（三〇一六頁）、『新唐書』巻八一（三六〇一頁）、『唐会要』巻四（四九頁）、『唐詩紀事』巻一五（王仲鏞校箋、中華書局、二〇〇七年、五一一頁）参照。
(13) 周紹良『唐代墓誌彙編』下冊（上海古籍出版社、一九九二年、一五〇八頁）。この石碑は河南省洛陽で出土した。『全唐文補遺』第一輯（一四五～一四六頁）にも収録。陶敏『全唐詩作者小伝補正』（遼海出版社、二〇一〇年、二四八頁）は、この墓誌銘と序文を引用して、張諤の生涯について基礎的な整理が行われている。
(14) （清）徐松『登科記考』巻四（趙守儼点校、中華書局、一九八四年、一四八頁）。
(15) 『通典』巻四〇「職官二二・秩品」（一一〇一頁）。
(16) 『通典』巻二五「職官七・太常卿」（六九四頁）。
(17) 『通典』巻三一「職官一三・歴代王侯封爵」（八七一頁）。
(18) 『旧唐書』巻三「太宗本紀」（五九頁）。
(19) 『旧唐書』巻四「高宗本紀」（七〇頁）。

(20)『旧唐書』巻八「玄宗本紀」（一九九頁）。
(21)『旧唐書』巻八「玄宗本紀」（二〇二頁）。
(22)『通典』巻四〇「職官二二・秩品五」（一〇九八頁）。
(23)『旧唐書』巻八「玄宗本紀」に「（開元十三年三月甲午）第十三男澐封為潁王」とある（一八七頁）。
(24)『全唐文補遺』第八輯（三秦出版社、二〇〇五年、六二頁）。
(25)胡可先『出土文献与唐代詩学研究』（中華書局、二〇一二年、五〇七頁）。
(26)張諤には「岐王美人」、「岐王山亭」、「三日岐王宅」、「岐王席上詠美人」などの作品がある。
(27)それぞれ『国秀集』巻中、『搜玉小集』、『才調集』巻九（〔明〕毛晋編『唐人選唐詩』、台湾大通書局、一九七三年、一四〇四頁、一五二一頁、七七二頁）参照。
(28)楼穎「国秀集序」（『唐人選唐詩』、一三三一～一三三二頁）参照。
(29)『才調集序』（『唐人選唐詩』、一九四頁）参照。
(30)この聯の詩題と詩句の「踏歌」について、松平本と内閣甲本において詩題・詩句・部立てともに「蹈歌」に作るが、国会本では詩題を「踏歌」に作り、詩句・部立てはともに「蹈歌」とする。このような文字の混乱は、平安時代の文人が、「蹈歌」と「踏歌」の概念と混同していたことから生じたと思われる。
(31)『登科記考』巻七（二四〇頁）。
(32)『国秀集』巻中（『唐人選唐詩』、一四五二頁）。
(33)（宋）陳應行『吟窗雑録』巻二六（中華書局、一九九七年、七四一頁）。
(34)陳尚君『唐代文学叢考』（中国社会科学出版社、一九九七年、二四〇頁）。
(35)傅璇琮『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社、一九九六年、七七頁）。
(36)『唐会要』巻四「雑録」（四九頁）。なお李範については第一章で詳述した。
(37)「陪岐王宅宴」が製作されたのは開元八年であるとの異説もある。霍志軍、安濤『盛唐士人求仕活動与文学以関隴地区為中心』（中国社会科学出版社、二〇一三年、二四四頁）参照。

(38) 『文苑英華』巻二五〇「寄贈四」(一二六四頁)。
(39) 『全唐文補遺』第一輯(四三三頁)。この墓誌銘については、程章燦「唐代墓誌叢考」(『古刻新詮』、中華書局、二〇〇九年、一三五～一三八頁)に考証が見える。
(40) 前掲注(39)、程章燦著書一三五頁参照。
(41) 前掲注(39)、程章燦著書一三七頁参照。